



▲学びの意欲と笑顔あふれる子どもたち



▲教室では、一人の先生に大勢の子どもたちが学びます



▲村人の総力で切り開かれた学校建設予定地



▲熱心に学ぶラオスの子どもたち



▲学校建設説明会に集まったドンニャイ村の村民、古い教室の床は土間になっています



心を豊かに
する「力」

総務課主幹 佐藤 周一



真の豊かさは
心の豊かさ
—ラオス訪問を終えて—

教育長 広瀬 要人

ラオスの村にはじめて行きました。

赤い土ほこりの道を長時間ピックアップ車の荷台にしがみつき、橋のない川幅50メートルもある二つの川を車で渡り山奥の集落に着くと、日よけ用の大きな木が10本ほど立つ校庭の奥にトタン葺きの古い木造校舎と緑色の新しい校舎が並んで建ち学校の前には、40人ほどの村人と教室の中で、多くの子どもたちが笑顔で待っていました。

ここは「ドンニャイ村」。白いコーヒーの花が咲く美しい農村です。

学校と言っても黒板が1枚あるだけの教室で、教科書をもつのは先生だけという、日本では想像もできない環境の中にあっても、子どもたちのきらきら輝く瞳に囲まれ、おだやかな村人の暮らしに触れていると、ここラオスはわたしたち（日本人）の心を豊かにしてくれる、そんな「力」があるのではないかと感じてきました。



集会に来た親子▶

2月9日から2月15日までラオスを訪問してきました。

教育委員会では、「ラオスを通して世界を学び、ラオスを通して飯館を知る」アジア交流事業を新年度から本格的に推進していきたいと考えています。ラオスを通して、子どもたちに何を学ばせ、学んだことを自分たちの生活や学習活動にどうフィードバックして行くか、ラオスの実態把握と基礎的資料を得るのが今回の訪問のねらいでした。

アジア各地に学校づくりを進めているAEFA（アジア教育友好協会）の案内で、ラオス南部サワラン県内の小・中学校及び学校建設予定地を訪問いたしました。

ラオスは国全体が貧しく、不完全な学校は45%にも及びます。山間へき地の多くの小・中学校は極めて粗末であり、電気も井戸もありません。教師や教科書・教材も不十分です。でも、どこの村に行ってもキラキラと輝く子どもの目があり、教育に真摯（しんし）に取り組もうとする親がありました。

これから、飯館の子どもたちにラオスの子どもたちの様子を伝え、外に目を向け、内を理解する学びの場を多く設定していきたいと考えています。国際人としての心豊かな村民をはぐくむために……。



Laos（ラオス） 正式名称はラオス人民民主共和国

人口の60%以上が山岳地域に暮らす少数民族国家であるラオスでは、多くの村人が自給できる食糧も不足しています。少数民族教育は小学校低学年までで、識字率は40%以下といった状況で、学校がない村が多い上に、教師も不足しています。

（NPO法人アジア教育友好協会ホームページより抜粋）

●お問い合わせ●
飯館村教育委員会
☎ 42-1631

ラオスの学校づくりを応援しよう

～「までい」の心を学び、思いやりの輪を広げるために～



▲水汲みに来た娘たち

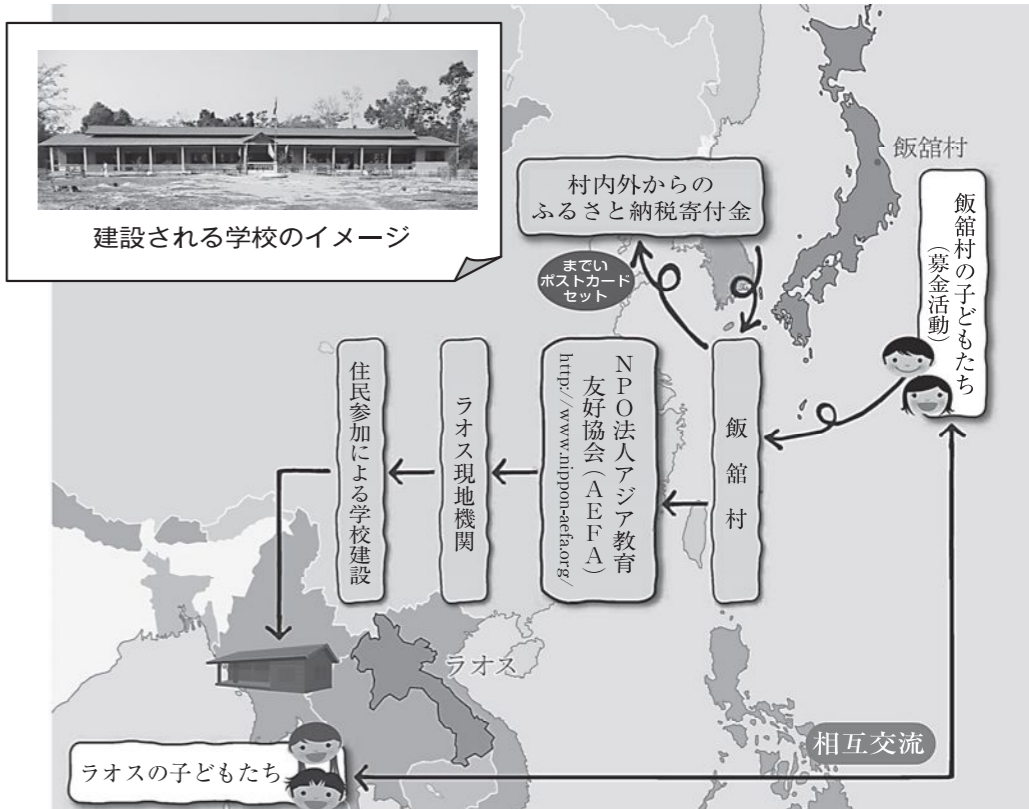
村は、人とひとがつながり、「までい」の心を深め、思いやりの心を広げようと、ラオスの子どもたちの学校づくりを応援する取り組みを平成21年度からスタートしました。

■学校づくりを応援したい

ラオスの学校づくりを応援する計画は、村づくりアドバイザーでもあり、NPO法人アジア教育友好協会（東京都）の理事を務める佐川旭氏（建築家）が小・中学校への出前講座を行ったことから始まりました。

子どもたちは、ラオスに住む人の心の豊かさや教育環境が整っていない現状について学び、同じ年頃のラオスの子どもたちのために、「学校づくり」を応援したいと考え、子どもたちによる募金活動を展開していきま

す。学校づくりには、おおよそ300万～400万円程度の費用がかかることから、子どもたちによる募金活動



のほか、村外から寄せられるふるさと納税の一部が充てられることとなります。

■今後の計画

2月には、広瀬教育長と村職員がラオスを訪れ、学

校建設予定の「ドンニャイ村」を視察しました。今後は、学校建設に加え、子どもたちの絵の作品交換、飯館村民歌や日本の絵本をラオス語にして贈る交流事業等を予定しています。